ベトナムにおける日本語教育の概観

高瀬利恵子

1．はじめに―ベトナム人留学生の増加

2011年度の日本の教育機関における留学生数は約13万人であり，その中では中国人留学生が圧倒的に多い。ベトナム人留学生の全留学生に占める割合は，2.5%と，数的には決して多くない。しかし，2010年度の約3,600人から4,000人へと一気に12%増加しており，留学生数増加の伸び率は高く，今後さらに増えるだろうと予測されている。ベトナムにおける企業主催の留学説明会には，日本の教育機関の参加が増え，多くの留学希望者が訪れている。本学も例外でなく，毎年数人程度であった留学生数が2011年度より急激に増え，現在の在籍者数は約70名程度，2013年度4月は35名のベトナム人留学生が入学する予定である。このように今後もベトナム人留学生は増加する傾向にあると思われる。

本稿では，筆者の2か月のベトナム滞在中に把握したことを中心に日本語教育の概観を報告する。客観的資料となる教育機関や学習者数等の統計資料は，年代が古かったり，全国的数字でなかったりし，十分に信頼出来うるものが収集できなかった。そのため本稿の報告は，筆者がベトナムの首都ハノイに滞在する中で実施した，日本語教育機関への訪問や学生へのインタビュー調査によるものを中心とする。そのため，本稿における数的情報や固有名詞は若干正確性に欠けることは否めない。今後日本の教育機関でベトナム人留学生の受け入れが増加することを考え，不充分ながら報告させていただくことを，ご理解いただきたい。

2．ITM日本語教育センター（以下“ITM”と略す）における日本語教育

筆者は，2012年7月15日より9月16日まで，本学の協定校であるハノイのITMにて日本語教育を行った。ITMは，日本での研修希望者・留学希望者に日本語教育を行う機関（会社組織）である。学生数（平均在籍者数）約400名，教員約20名で，全寮制の学校である。他の日本語学校と異なり，日本に行くという目的を持った学習者だけを対象にした学校である。学生の年齢は18歳から25歳程度までで，高卒者を中心に，大学卒業者もいる。学生は，北部を中心にベトナム全土から集まっており，毎月新クラスが開設されるため，数は一定しない。主に研修生を対象にしたクラスのある第一センターと主に留学生を対象にしたクラスのある留学センターに分けられ，校舎は車で1時間弱離れた場所にある。両センターとも，私立学校の一部を借りて校舎にあ

写真１

写真２

てている。筆者はこの留学センターにおいて，本学に留学予定の学生を対象に，ベトナム人教員とともに日本語授業を実施した。

ベトナム人教員20名は，大学で日本語を学んだ者と日本滞在経験者がいる。基本的に全員が担任を務めており，受け持ちクラスのすべての授業を行い，テスト，成績評価等行う。日本人教員３名は，日本から招聘しており，ボランティアである。各クラスとも毎日１コマ程度会話の授業があり，日本人教員が担当している。

全寮制のため，学生は教室のすぐ隣にある宿舎に宿泊している。朝は５時起床で，全員でのジョギング，体操，朝礼が行われる。授業は50分授業で，朝８時20分から昼休憩をはさみ，午後４時までで，７時間目まで行われる。その後の自由時間に夕食や入浴，洗濯等を行い，スポーツや買い物など自由に時間を過ごす。そして夜７時より10時までは決められた自習時間で，全員教室で学習をする。夜間は生活指導員が指導を行い，遅刻や生活態度などにも気を配っている。宿舎，教室にテレビ等はなく，学生の一般的な家庭生活に比べ，厳しい集団生活を経験している。

写真１は，筆者が，留学前授業を実施した学生と校舎の外で写したもので，写真２は，教室で保護者に対する留学説明懇談会を催した時の写真である。

３．大学等教育機関における日本語教育

ベトナムにおける大学教育は，以前は公立大学のみであり，進学率も５％程度と，高等教育を受ける機会は多くなかった。大学の数は日本の十分の一程度であり，人口に比してかなり少ない。しかし，ここ10年の間に私立大学が増え，2011年度の進学率は，約15%と大幅な上昇を見せている。

そして日本語教育も，この10年でかなり普及し，多くの大学で行われるようになった。筆者は有名な大学５校を訪れた。これら大学の外国語学習で日本語を履修する学生は，英語について二番目に多い。以前はフランス語の学習者が英語に次いで多かったが，最近はフランス語を学ぶ者

が減少し，日本語と中国語の学習者が増加している。韓国語の学習者も同様に増加傾向にあった。

ハノイには，ハノイ国家大学，ハノイ大学，ハノイ工科大学，ハノイ貿易大学などの有名な歴史のある公立大学がある。ベトナムハノイ国家大学は，教育部の管轄にある国立大学と異なり，政府直轄の大学で，総合教養大学，人文・社会大学，教育大学，外国語大学，科学技術大学の５大学と，付属研究所を含んだ集合体の呼称である。ハノイ市内に三つのキャンパスを有し，３万名の学生がいる。またホーチミンにある，理工系の最高峰と言われるホーチミン工科大学やホーチミン技術師範大学は，提携している会社により，日本語クラスが運営されている。

私立大学としては，ハノイに2006年に設立されたFPT大学などがある。FPT大学は，ベトナムの大手ソフトウェアの会社FPTコーポレーションが設立した大学で，卒業生が日本で働くことを想定して，日本の高度なIT技術と日本語を同時に学ぶ学校であり，競争率も高く，優秀な学生が学んでいるようである。このように，公立私立を問わず，会社組織が学校教育に大きく関わっているようである。

ハノイ以外の各地でも日本語教育を行う大学は増えており，2002年に日本語学科を設立したダナン外国語大学，2006年に設立したフエ外国語大学，2009年に設立したホーチミン師範大学などがある。以下に３大学の状況を報告する。

３－１．ハノイ国家大学

ハノイ国家大学は1992年にハノイ国家大学 - 外国語大学　東洋言語文化学部日本語日本文化学科を設立し，常にベトナムにおける日本語教育をけん引してきたと思われる。ベトナムで初めて日本語関係の大学院を設置し，2005年にはベトナムで初めて日本語教師養成課程が設置された。本課程の設立にむけては，在ベトナム日本国大使館やベトナム日本人材協力センター（VJCC）の協力を得，さらにギソンセメント社からの支援を受けている。特に教科書作成に当たっては，東京外国語大学から専門家を招聘して取り組まれたようである。毎年選抜された成績優秀者30名が本課程に進学し，国の政策により学費免除を受けて，日本語教授法や日本文化を学ぶ。卒業生は日本語教師として各所に赴き，ベトナムにおける日本語教育を推進普及している。大学敷地内にある付属高校でも卒業生が教師となって日本語教育を行い，優秀な日本語学習者を輩出している。筆者は，この高校で日本語を学んだ一期生で，当該大学に進学して現在は当該大学で教鞭をとる教師にも会うことができた。

筆者は，２年生の授業に参加させていただいた。一クラスの学生は20名程度で，学生は自主的に手を挙げて発言し，予習もしてきており，積極的に学習している様子が窺えた。授業は，教科書の文章の読解であり，ベトナム人教員はほぼ日本語のみで授業を行い，学生も詰まりながらも日本語で答えるという非常に質の高い授業であった。どのクラスもそうであったが，出席を取ることはなく，学生が授業に参加し，自主的に学習することが前提となっている。この大学は日本語能力試験上級レベルの現地実施団体でもある。

写真３

写真４

写真３は，日本語学科がある校舎の前で，学生がベンチで勉強している様子である。写真４は，授業風景で，カメラを向けるとみんなが一斉に席を替わりカメラポーズをとってくれた。

３－２．ハノイ大学

ハノイ大学は，もともとはハノイ外国語大学が総合大学に変わったものである。ここは日本語能力試験初中級レベルの実施団体である。日本語学科は各学年４～６クラスがあり，学生数はそれぞれ100名～150名である。一般クラスの他にCNBという日本語と情報技術を学ぶクラスがある。教員は31名で，その内２名が日本人教員であるが，ベトナム滞在のボランティアである。ベトナム人教員の中には，日本の大学で修士号を取得した方が５名おられた。

筆者が訪問した時は，事務所で日本語試験の申し込みを受け付けており，ごったがえしていた。また留学希望者が数名相談に来ており，留学熱の高まりを感じた。日本の大学院への留学を希望する４年生が訪れていたが，３年生の時に１年留学経験のある学生で，日本語レベルの高い日本語教師志望の学生で，現在もベトナムの日本語学校でアルバイトをしているそうである。

筆者は２年生の授業を見学させていただいた。一クラスの学生数は20名程度で，教科書は『ニューアプローチ』を用いている。１年次に『みんなの日本語』を勉強している。授業は，教師に続いて学生が本を読み，教師が言葉の意味をベトナム語で説明し，練習時間をおいて教科書の問題に答えていくという方法で進められた。写真５は，その授業風景である。

写真５

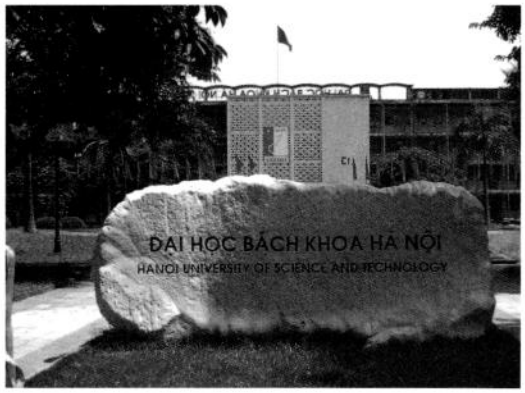

写真６

写真７

３－３．ハノイ工科大学

ハノイ工科大学は理工系を中心とした大学であるが，外国語教育にも力を入れている。複数の国との国際プロジェクトがあり，SCHOOL OF INTERNATIONAL EDUCATION　という組織を設立し，複数の外国語を学ぶシステムを構築している。2002年にまず，ドイツ，ロシア，日本と協定を結び，その後2006年までにさらに５か国と協定を結んだ。授業は，大学の授業から独立して組まれており，１か月の短期から１年の長期コースまでがある。英語の学習者が圧倒的に多く，次に日本語や中国語の学習者が多い。日本語学習は，2012年に第６期のプログラムを実施しており，日本人教員は２名である。学習者は大学の授業で工学系専門知識を学び，本プログラムで外国語を学ぶ。その国で専門の研究をしたり就職するという目的を持った者が多くいる。

写真６は，ハノイ工科大学の正門付近，写真７は，外国語プログラムを実施している校舎の廊下の掲示コーナーである。

４．日本語学校における日本語教育

多くの学習者が知っている日本語学校は限られている。ハノイでは，竹山日本語学校，栄光日本語学校，のぞみ日本語学校などがある。ホーチミンでは，ドンズー日本語学校，さくら日本語学校，サイゴン日本語学校などがある。これらの日本語学校はいずれも朝，昼，夜のコースを設定し，授業を実施していた。学校紹介はミニリーフレットがあり，授業の時間や授業料の案内は，リーフレットと別に印刷されたものが受講希望者に随時渡される。授業料は，コースにより異なるが，１カ月2,000円程度であると思われる。それ以外に小規模の学校は幾つかあるようであるが，個人的つながりから学生を募集し，数名を対象に自宅で授業をするものであった。

４－１．竹山日本語学校

竹山日本語学校は1954年に設立され，歴史が古い。日本の芸能人杉良太郎氏の多額の寄付によ

り設立された学校である。ハノイに住む人の多くは，日本語学校と言えば，この学校の名前を挙げる。３階建ての校舎と敷地を有する大きな学校である（写真８）。創立時からの校長は，杉氏と懇意にしており，民間での日本語教育を推進してきた。学習者数は約1700名，その内の60%が大学生である。１クラス十数名ほどの授業が各教室で行われていた。日本人教員は８名おり，その数はハノイで一番多い。その内４名は，日本の日越友好協会から派遣された教員で１年間滞在する。他の４名は，ベトナム在住のボランティア教員である。

写真８

教室は10ほどあり，さらに非常に広い教員室があって，設備も整っていた。教員はほぼ毎日４コマ程度の授業を受け持っているようである。

４－２. ホーチミン市の日本語学校

ホーチミンは，ハノイに比べ町全体が開放的な雰囲気であり，日本語学校も同様であった。ホーチミンでは，ドンズー日本語学校，さくら日本語学校などが有名である。ハノイではどの学校もアポイントなしでは話を聞くことができなかったが，ホーチミンでは快く受け入れてくれた。日本語学習者の数もハノイに比べ多い。日本留学者の数はハノイの方が多いのであるが，それは国費留学生が多いためであり，私費留学はホーチミンの方が多いという現地教員の話である。

ドンズー日本語学校は，３階建の校舎を持ち，日本人教員のための宿泊設備も備えている。学生数は約2000名，日本人教員が６名いる。この学校の教員は，他校と違い，日本語教育を主目的にして数年にわたりベトナムに滞在している方々であった。また，他の学校の日本人教員はほぼ無給に近いボランティアに頼っているが，この学校のボランティアは給料に相当する謝礼が支払われており，充実した教育体制が整えられている。教材は独自教材を編み，特に漢字教育は有名で，非漢字圏の学習者が最も苦手とし，試験の上級合格を困難にする原因である漢字の習得に素晴らしい成果を上げている。

さくら日本語学校は，非常に開放的で、日本語教育だけでなく，日本文化体験にも力を入れており，日本の習慣に合わせて，様々な行事が組まれている。多くの着物や茶道具なども寄付されており，学生が文化体験できる環境が整っていることは特筆できる。そのようなカリキュラムから，学生のレベルの高い会話力には定評がある。日本人教員は，約12名おり，短期，中期に滞在している。全員ボランティアか日本企業からの派遣である。

5．日本語教育の現状

筆者が滞在した期間は短く客観性に乏しいが，ベトナムでの日本語教育はまだそれほど普及していないと感じられた。それは日本の協力支援が十分に行われていないことが一つの原因であると思われる。たとえば中国では，以前かなり大規模な日本のプログラムが実施され，日本語教員や大学教員が中国全土に派遣された。その時中国人教員の研修も行われた。

ベトナムでは，2001年ハノイとホーチミンに，ベトナム日本人材協力センター（VJCC）が開設され，日本の情報提供や，日本語教育，教師の派遣，日本語能力試験に向けた対策講座等の開講等が取り組まれた。また2003年には国際交流基金による「ベトナム中等学校における日本語教育試行プログラム」が開始された。その後小学校，中学校，高校での日本語教育が行われ始め，日本語教師会が発足し，シンポジウムが開催されるなど，徐々に普及推進されている。上に述べた日本語教育機関にも毎年日本人教員が派遣されている。ただしこのプログラムは2013年に終了の予定である。

筆者が幾つかの学校の授業を見学する中で感じたことは，日本人教員の少なさと教材の少なさである。最近，日本で外国語を専門に学習する際，ネイティブの専門家はほぼ必ずいると言っていいだろう。しかし，ベトナムで日本人教員に習える機会や時間はほとんど無い場合が多い。また大学においても日本語学校においても，授業で使用される教材は限られており，教員がそれ以外に持っている教科書や資料も少ないそうである。ただし，インターネットの普及は進んでおり，学校でも個人でも十分に活用されているため，教材に利用されたり，日本の情報が伝えられたりしており，その面では良い環境があると言える。

また筆者の限られた情報では，教員室があまり整っていなように思えた。大学の工学系の教員は教員室があり，パソコン等の備品もあったが，日本語の教員は共同で教員室を使用しており，備品や図書などがあまりなかった。コピーなどの機器も簡単に使えるようではなかった。筆者の把握不足かもしれないが，ひとつの印象として挙げておく。また学生のまじめさも体感することができた。筆者がインタビューした大学生の数名は，皆毎日３時間は予習復習すると答えた。出席を取らないという事実は，恐らく遅刻や欠席が皆無に近いということであり，日本の高等教育機関ではあまり見られない状況である。

また日本語教育に関してではないが，ベトナムでは今，職業教育と体育授業の充実が教育の課題となっている。農業国から工業国へと発展を遂げているベトナムにおいて，職業教育は急務の課題と思われる。同時に，体育として走ることや体操などしか取り組まれていない現状で，スポーツ競技，団体競技の重要性が叫ばれる背景には，情操教育や，規律，競争力を育むことなど，現代社会に必要な力を育てることが求められていることが挙げられる。

6．日本に対するベトナム人の意識

ベトナムへの日系企業の進出は急速に進み，多くの日本企業団地が建設されている。それに伴い，長期滞在日本人の数も同様に増加している。アジアの中では数こそ中国やタイなどに及ばないが，昨年の長期滞在者の増加率は10%近く，アジアで一番の増加である。日系企業の進出に伴い，日本語学習者の就職先が増え，待遇も平均より良くなるため，日本語学習者の数は当然多くなっている。

ベトナムでは学歴志向はそれほど高くなく，外国での研修や外国留学，外資系企業への就職を希望する者が多い。学問分野としては電子工学，自動車工学の人気が高い。外国語は難しい分野とされ敬遠されてきたが，近年外国語学習者は増加している。筆者が学習者に聞き取りをした中では，日本語学習者の動機は，日本の会社への研修希望者を除き，大きく二つあるようである。一つは子供の時から日本のアニメや歌などに触れ，日本に関心を抱いた者。二つ目は，高度な技術を持つ日本で，日本の技術を学びたい，日本の会社で働きたいという就職希望から学習する者である。

これらの背景には，ベトナムのグローバル化，情報技術の先進性がある。以前の発展途上国は，なかなか外国の情報が伝わらない状況にあったが，今は，世界的なIT関連機器の発展普及により，ネットを通じてどの国にも外国の情報がすぐに伝わる。ネットに限らず一般家庭のテレビも数十チャンネルがあり，外国のニュース・文化に触れることができる。

歴史的に様々な国との複雑な背景があるベトナムであるが，日本との関係は良好で，親日的である。アジアの近い国として日本文化への親しみやすさ，今農業国から工業国へ歩み出そうとしている状況での日本の高度な技術への学習意欲は，今後もますます留学を希望する者が増えることを示唆していると言えるだろう。

7．留学生受け入れの視点から見た今後の課題

今まで教員や教材などが限られている状況で，日本語教育は非常に困難であった。しかし，徐々に日本滞在経験者が増え，また国際協力機構の支援による中等教育・高等教育機関における教育支援・教員養成支援の結果が表れ，学習者の層の増加，教員の質の向上が促進された。これらのプログラムはまだ10年程度であり，今ようやく修了生が育ってきた時期である。またベトナムの大学と日本の大学との協定，日本の非営利組織と日本語学校の協定などにより，日本人教員が派遣され，学習者も日本人から直接学ぶ機会が増えつつある。

ベトナムにおける日本語教育の内容についていえば，まず，上級レベルの教育機関が非常に少ないことが課題として挙げられる。また非漢字圏学習者の共通の課題であるが，漢字学習は非常に難しい。漢字教育がまだまだ体系的になっておらず，現在の教員も自分で学習してきた人が多いため，漢字教育が授業に組み込まれていない場合が多い。文法中心の授業が多いようである。

漢字に次いで会話力育成も難しい課題である。会話学習は，もっぱら日本人教員が担当する場合が多いようである。しかしいずれの学校でも日本人教員が十分にいるわけではないので，１日に１時間程度の会話の授業となる。それでは十分に力がつかないのが現状である。会話の授業を増やすことや，会話応用力を伸ばすことができる教材の利用，ベトナム人教員が日本語を用いて授業を行うことなどが求められている。

さらに基本的な表記についても注意すべき点がいくつかある。ひらがなでは，特に「い・き・さ・ふ・を」などに関して，共通したくせがあり，上級に進んでも改善されにくい傾向がある。アラビア数字の表記も違いがあるが，日本語教育の中で見落とされがちである。

もちろん本稿の２章３章で述べたとおり，各教育機関でそれぞれ教授法を研究し取り組んでおり，今後その学習者の輩出により，カリキュラムや教授法が改善されていくことであろう。

また，留学生の生活や考え方の違いについても，受け入れ側の認識や配慮が不可欠である。ベトナム人学生の場合，人間関係の親密性は特にあげておく必要があると思われる。家族・親戚・友人の関係は時間的にも距離的にも心理的にも日本人と比較してかなり密接であると思われる。たとえば，友人が訪れた時や，親戚が病気の時など，自身の重要な予定や課題より，それが優先されがちである。そのため学習途中で帰国することや，テストの日程を変えてほしいという要望が出るなど，日本の考え方とは違う行動が見られる時がある。そのような際にも背景を知ったうえで十分な説明や説得が必要だと思われる。

ベトナムは複雑な歴史背景があるため，他国に対する感情も複雑である。感情の表し方や主張の仕方に日本人との差異があると感じるので，心理的ケアには教職員の認識を一致させておく必要があるだろう。さらに学習指導，成績評価の伝え方にも注意が必要である。